

緋弾のアリア 夢幻召喚
喚(インストール)

流れ水

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

前世普通のオタクだった主人公。

転生した先は日本。でも本当にここ日本？治安、悪過ぎ無いか!?

魔法少女、吸血鬼、超能力者、超人？漫画みたいな国家権力に匹敵する力を持つ組織もマジで有る。

なんかオカシクない!?

目次

第1話

第2話

1

14

第1話

——超能力者、超人、化物、魔術師、魔法少女など、世の中には確かに超常的なモノが存在する。

——アメリカ

摩天楼のごときのビルが建ち並んでいる。

しかし、人影が全く無い。

異常な雰囲気に含まれていた。

——桜井咲哉は逃げていた。

何から？分からない。

姿が見えないのだ。

かれこれ10分程走っているが一人も人を見かけ無い。

明らかな異常。

走りながらどうしてこうなったのか思い出してみる。

咲哉は伊・Uという組織に属している。確か、伊・Uからアメリカのとある馬車まで渡されたスーツケースを持っていった後、世界が一変したんだ。

…恐らく今いる空間は絶界。異能者が展開する異次元空間。この空間は術者が戦い易い場に変化させるために展開される。

どれだけ走っても景色が変わらない。

逃げてでも無駄か。

立ち止まり、後ろに振り返る。

「いるんだろ。一体誰だ、何が目的だ。」

その声に応じる様に、何も無い空間からジジツ……という音に続いてレインコートのような物を着た人影が現れた。

一人や二人では無い、ぞろぞろと現れる。

囲まれているぞ、いつの間にか…。

周囲に視線を巡らせると——身体をプロテクターで覆い、顔にペイントをしている男が言う。

「名前はジーサード。目的は伊・Uって言えばわかるか。」

伊・Uのせいかよっ!? 何で組織に入ったら入ったで争いごとに巻き込まれるかなあ。

まあ、救いは四六時中襲われたりする事が無くなった事か。

代わりに襲ってくる奴らの強さが跳ね上がったけど。

咲哉の容姿は美麗端麗。真っ白な雪のような肌に、真っ白な髪。瞳はルビーのように

赤く、人を魅了するような妖しい雰囲気漂っている。完璧外見的には雪の妖精の様な美少女であるが、実は――男だ。残念ながら……男だ。

服装は裾の長い白いコートにオーブンフィンガーグローブと白いブーツと全身真っ白。革のベルトと銀色の金具が至る所に付いていて、腰にある二尺四寸二分(約73cm)の刀を固定している。刀の柄と鞘も白く、鏝の黒い菊の花がアクセントとなっている。

ポツリポツリと、道路のど真ん中に立つ朔夜を取り囲む人影が増加して行く。一体何人いるのだろうか。いや、人なのか？

目にうつるのは異形の集団。

狐耳と尻尾があるマロンブラウンの髪の少女。

顔の半分を包帯で隠した、細い体格の黒人。

顔面や首に縫い後のある白髪の男。

包帯に包まれた老紳士風の男、瞳の色が左右で異なる銀髪の少女。

頬に弾痕のある筋骨隆々の2mを超える白人。

メカみみたいなプロテクターに身体を覆われ、腕にはガトリングガン、腰にはジェット機のよいな可変翼が付いている少女。

更には、無人の車?、等々。

ファンタジーな格好している奴らやSFの武装している奴らまでいる。

そんな統一制が無くてわけのわからない集団全てが朔夜に各々の武器——銃、剣、盾、呪符、刀、ロケットランチャー、ガトリングガン、レーザーガン、e t c——を向けていた。

何かしらの行動を取ろうとすれば即座に、攻撃が飛んでくる事だろう。

狐耳の少女が言う。

「分かつておるだろうが、ここは私の絶界。逃げられはせぬ。数でもこちらが圧倒的に有利。諦めよ。」

「——という訳だ。来いよ朔夜。」

ペイント男が拳を構える。

え!! 戦うの! さっきの降伏勧告じゃ無いの! ?

「——つつつ、ソード様自ら戦うなど、なりません。なりませんぞつ。」

どうやらこのペイント男、ジーソードがこの集団のリーダー的な立場があるようだ—

「こんなヤツ、ソード様が手を必要なんてありませんぜつ。」「何なら俺一人で相手しましょうか。」「あたしにやらせて。」などと騒ぎ出す手下たち。

完璧に自分たちの優位を確信しているような言葉に少し苛立つ。

確かにしてやられた。

もう逃場は無い。

咲哉は敵の罠にまんまとハマったのだ。

降伏という選択肢は無いみたいだし――

――やるしかないか。

頭のスイッチを切り替える。

「ちよつ、ヤバい。みんな離れて!」

瞬間、咲哉の覚悟に反応するように、銀髪オッドアイの少女が言つて、周囲を取り囲んでいた者たちは一斉に離れると同時に攻撃――銃弾、炎球、鎌鼬等――が放たれる。

「夢幻召喚（インスタール）――（ジークフリート）」

眩いた瞬間、

その場は大瀑布のごとき出現したプレッシャーに支配された。

少女の足元から魔方陣が出現する。

魔法陣の出現は刹那。

その刹那で、魔法陣は足元から頭の方へと移動して消えた。

魔方陣が通つた後の、

――咲哉の装いが一変していた。

手には身長とほぼ同じ長さの大剣、幻想大剣（バルムンク）。

身体のうちこちにを覆うのは白銀の甲冑。ただ胸だけは鎧に覆われておらず、開いている。

開かれた胸元に見えるのは先と一変した褐色の肌、それに淡いグリーンの光を放つ複雑な紋様。

——彼らに放たれた攻撃に朔夜が剣で一振りする。

ドウウウンツ！爆発音。剣から放たれた衝撃波が攻撃を粉碎した。

「……なに、これ？」

どこからか呆然とした声が漏れる。

異能を持つ者達の反応が特に激しかった。

異能を持つ者は相手の異能の力を把握できる。

これは、大小あれど異能を持つ者であれば誰しもが持つ基本的な能力。

彼らには、まるで天が地に落ちてきたかのような圧倒的圧力に身を支配されていた。

異能を持たない他の者達も足がすくみ上がっている。

彼らは幾多の戦場を、死線を乗り越えた一流の戦士である。

そんな彼らの勘がいうのだ―お前、死ぬぞ、と…。

それでも彼らは一流の異能者、戦士達である。

目の前の死に抗うべく各々の武器を手に取り、攻撃する。

ボロボロと落ちてカランツカランツと音を発てて行く葉莢。

あるものはロケットランチャーを、ある者は炎球を、ある者は雷撃を、各々のできる

限りの攻撃を放ち続ける。

それらに向かい、咲哉は連続で剣を振るう。

ドゥウウウウウツ、超音速で振られた剣から放たれた衝撃波達により彼らの攻撃を粉碎する。

しかし、それだけ、一時しのぎだ。

彼らの絶え間ない攻撃が、次々とやって来る。

衝撃波で粉碎しようがキリがない。

このままでは体力を削られてジリひんになるのみ。

攻撃している本人たちにダメージを与えなければ負ける。

咲哉は弾幕共言うべき彼らの攻撃に向かい、地を踏み砕きながら一步。爆撃や銃弾に嵐に晒されながら二歩目を、そして、両手に持った剣をギシギシと軋むほど力強く握り締めながら、三步目を踏み出し、距離を潰した。

確かに、攻撃は身体に当たっている。しかし、銃弾は咲哉の身体に弾かれ、雷撃や炎は咲哉の身に一つもダメージを与えない。

—これで剣の間合い。

一番近くにいる黒人の男に向かい剣をスウィングする。

「おおオオオオおおお!!流星《メテオ》!」

超音速で振り下ろされる剣。その剣の腹にペイント男の超音速の拳がぶつかる。

黒人の男を一刀両断するはずだった軌道はズレ、空を切り、勢いそのままアスファルトに叩きつけられ

—大地を砕く

その振動は大地を揺らす。

ぐらつく足場に殆どの者が体勢を崩す中、ペイント男は、跳んで回避した。そのまま身体をくるりと回転させ、足を跳ね上げる。種の殻が割れる様にプロテクターのあちこちが開き、ロケット燃料の噴射炎が上がる。

回転力とジェットで加速した、超音速を超えた回し蹴りが—

—ゴギアアアアアアア!!明らかに人を蹴った音では鳴らない音を立てて、咲哉の首に炸裂。

咲哉の身体が宙を舞い、ビルの壁にめり込んだ。

そこに、追撃。

先程よりも更に苛烈で激しく、もはや、爆撃機の絨毯爆撃のような弾幕、異能、等の攻撃の嵐。

ボロボロになって行くビルの壁から出た土埃が咲哉の姿を隠す。

「止めろ。流石にやりすぎだ。」

ジーサードの声に、攻撃が止まる。

しかし、彼らにはしつかり感じていた。

土埃の中に咲哉が生きていることを。

今回の目的は咲哉を捕縛して伊・Uの情報を引き出すこと。殺す事が目的では無いのだ。

流石にこの攻撃には致命傷を負っているかもしれないが生きていれば何とでも対処出来る。

そう考え——彼らは攻撃を止めてしまった。

その隙を咲哉は逃さない。

「——剣よ満ちろ」

咲哉が剣を天に突き立てるように持ち、剣の力を解放する。剣から放たれる黄褐色の極光が顔を照らす。

極光は偽の天を破壊し、本物の空にまで伸びていた。

圧倒的魔力の渦は土埃を散らすにだけでなく、周囲のビルのガラスを全て破壊し、人々まで吹き飛ばそうとする。

土埃が吹き飛んだ先にあつた咲哉の身体は無傷。全くの無傷。あり得ない光景である。

火山が爆発したかのように、溢れ、膨れ上がって行くプレッシャー。

彼らの恐れに震える瞳が傷一つ無い朔夜を見る。

そこに映るのは人の姿では無い。

今にもブレスを吐こうと口に力を溜めている龍。

天を衝くほど巨大な邪悪な黒龍。

この龍に比べて己の存在がなんてちっぽけな存在だろうか…。

彼らの心は咲哉の存在感に呑まれたていた。

「おい、来るぞ。テメエら、呑まれるな。もつと気をしっかり持ちやがれ。」
ペイント男のビリビリとした声が響く。

その声と共に茫然としていた彼らの戦意が復活する。

即座に、障壁を生成して、周囲の建物に身を隠したり、と守りを固める。

―だが、もう遅い。遅すぎた。

「『幻想大剣・天魔失墜』」

剣を、黄昏の極光を、振り下ろす。

瞬間、周囲に半円状に爆発的に広がる極光。

極光は呑んだモノ全てを破壊、塵に返し、余波の風は全てを吹き払う。

残されたのは、ただの塵と瓦礫は山…。

術者が死んだことで維持出来なくなつた絶界が解除される。

立っているのは普通の交差点。

咲哉は簡易な認識障害の魔術を使い歩き始めた。

今回朔夜が力を借りた英雄はジークフリート。

悪竜の血を浴びることで不死となつた大英雄である。勿論、完全な不死という訳では無い。その身体はBランク以下の物理攻撃と魔術を完全に無効化し、更にAランク以上の攻撃でもその威力を大幅に減少させ、Bランク分の防御数値を差し引いたダメージとして計上する。また正当な英雄による宝具の攻撃の場合はB+相当の防御数値を得る。但し、伝承の通り悪竜の血を浴びなかつた、背中にある、葉の様な形の跡が残っている部分のみその効力は発揮せず、その個所を隠すことも出来ない。背中を開いた鎧を纏っているのもそれが理由である。

しかし、朔夜の場合、もう一つ弱点がある。

朔夜の身長は133cm、体重29kg。更に、鎧の重さを加えても軽い。

つまり、朔夜は重い攻撃を受けると、吹き飛ばされてしまう可能性があるのだ。

まだ、地面に足が着いている場合は、ジークフリートの筋力で何とかなるが、宙に浮いている間は簡単に吹き飛ばされる。

これが、ジークフリートの力を借りた朔夜の弱点である。

「絶界、解除。」

「マジで死んだかと思ったぜ!!九九藻、助かった!キスの嵐を降らしたいって位感謝してるぜ。」

「い、いえ、ジーサード様…そんな…」

狐耳の少女―九十九がペイント男、ジーサードの言葉にデレデレとする。その周囲には様々な人がいた。

「ヤバイ。ヤバ過ぎるぜアイツ。」

「あれは何なんだよ。」

「ぜってえ人じゃねえ事は確かだな。」

ガヤガヤと話すのは咲哉を襲った集団、ジーサードリーグ。その名の通り、ジーサードをリーダーとして集っている集団である。

「はあはあ、生きてる。生きてるぞ。俺、死んでないよな？生きてるよな？」

「ジーサード、今回ばかりは僕も死んだと思ったよ。」

「いや、あそこまでヤバいとは俺も想定して居なかった。すまん。」

タワールシールドにジーサードが謝ったり、各々軽口を叩いたり、自分が生きているのか確認したりしている。

彼らは黄昏の極光に吞まれる直前、絶界を一瞬だけ部分的に解除して脱出して逃げたのだ。これは、念話等のオカルト技術やSFのような先端科学兵装によって瞬時に全員の位置を割り出せたからこそ出来たことである。それでもギリギリ。

何か一つ、ほんの僅かでもピースがずれていたら、今頃彼らは極光に吞まれて塵と化していたことだろう。

「まさか伊・Uがあんな化物集団だったとはな。藪を突っついて出てきたのはドラゴンってか。伊・Uにはあれ以上の化物もいると考えるべき、か。しばらくの間は力を蓄えるしか無いな。」

ジーサードが小さな声で呟いた。

第2話

——伊・U、潜水艦内の食堂

伊・Uとは数多くの超人的人材を擁する戦闘集団。

第二次世界大戦中、枢軸国の共同計画として創設された超人兵士の育成機関がそのルーツである。

組織名のイ・ウーは、組織の本拠地である原子力潜水艦・ボストーク号に書かれた「伊U」の文字をそのまま読んだ音を語源としている。

更に、核武装もしており、いかなる軍事国家も手出しできない戦闘集団。

——というのが咲哉の所属している組織である。

咲哉にとってみれば場違い感この上無い。

咲哉はボンヤリとこれまでの人生を振り返る。

元々咲哉自身、前世をもつだけの存在であり、特に目立ったところが無い雑魚魔術師だ。

前世では少しオタクなだけの普通の日本人。

今世では、両親共に魔術師であったため、当然のように魔術を教えられたが、残念な

がらあんまり才能が無かった。

それに比べ、妹はどうやら本物の天才であったようで、俺が一つの魔術を必死で学んで修得している横で、十も二十もの魔術を修得し、更には改良して新しい魔術を産み出していた。

その光景を目の前で見せつけられた俺は心が折れた。もうそれはポツキリと…。努力して必死で魔術を修得するのが馬鹿らしくなつたと言つていい。

それから、俺はひたすら趣味に走つた。前世のアニメや漫画の魔法を再現しようとした。勿論、魔術師としても中途半端である見習い魔術師程度の咲哉には失敗付くめだった。

それでも、楽しかった。

—やがて、その試みは一つの偶然の成功を生んだ。

Fate/kaleid liner プリズマ☆イリヤに出てくる魔術礼装、クラスカード。鷹位の魔術礼装を媒介とすることで英霊の座にアクセスし、「自身の肉体を媒介とし、その本質を座に居る英霊と置換する」、アイテム。簡単に言えば、「英霊になる」事が出来るアイテム。

普通はへっぴょこ魔術師な俺が作ることなど天地が逆さまになつてもできないだろう。

—置換魔術とは、錬金術から派生した魔術。あるものを別のものに置き換える魔術で

あり、等価交換かそれ以下の性能しか発揮できない。

置換魔術の性質上、「新たな何か」を生み出すことが出来ない。

しかし、逆に言えば、知っているものであれば大抵のモノは生み出せる可能性がある。咲哉は前世のお陰でエインズワース家のクラスカードを知っている。

だから、カードにエインズワース家のクラスカードそのものを置換すれば良いではないかと考え、クラスカードの製造に成功した。

そこからは初めて製造に成功したクラスカード、世界最高峰クラスの魔術師であるメディアの力を使って『知っている英霊達』のクラスカードを製造。更に、英霊達の力を使い、改良した。

そうして出来上がったのが咲哉以外は使え無い専用のクラスカード。

カードは咲哉の身体の中に嚴重に収納され、咲哉の意思一つでいつでも「英霊になる」事が可能なのである。

クラスカードを作った、この事実だけで咲哉は満足していた。

だが、偶然、超人同士の戦いに巻き込まれた時、生き残るためにクラスカードを使わざる得なかった。：使ってしまったのだ。

それからは、巻き込みに巻き込まれる超人大戦。

それでも咲哉は生き残った。

当然である。

英霊とは文字どおり一騎当千を体現する者。

その力を咲哉は振るえるのだ生き残れないはずが無い。

だが、そんな巨大な力を振るえば組織や国に目を付けられるのも当然の帰結であるといえる。

結果、実際に、伊・Uに目を付けられて、入ることになった。

本当にあつという間の転落人生である。

ナニ？核武装もして、いかなる軍事国家も手出しできない戦闘集団って？何でこんな危険組織に俺が居るん？意味分からん。俺は至つて平々凡々なんだよ！！

はあ、普通の日常に帰れたらなあ。

「どうしたんだ。そんなピリピリした雰囲気を出して。今日はやけに不機嫌だな。」

後ろを見るとおかつぱの少女、カツエがいた。右目の眼帯には旧ナチスのハーケンクロイツが描かれていて、マジモノの旧ナチスの残党である。ベルベットのローブに黒の魔女帽子、と装いは西洋の典型的な魔女そのもの。というか、水を操る魔法に長けた、厄水の魔女と呼ばれる、本物の魔女である。

伊・Uでは先生も居なければ生徒も居ない。伊・Uに所属する者全てが先生であり、生徒、互いに技術を吸収して際限なく高め合うのが伊・Uなのである。

カツエは咲哉にとって伊・Uでの数少ない友人である。

「少し考え事をしていてな。」

「悩み事なら何かあたしに出来る事があつたら言えよ。」

カツエちゃん、本当にええこや〜。

敵には容赦の欠片も無いけど。

「あ、そうだ、あたし、あと数ヶ月で、イ・ウー退学するんだ。」

「ずいぶんと急だなあ。」

「その、ずっと前からイヴェリタ長官に魔女連隊に帰隊するように催促があつたんだ。

あの、その…さ、咲哉も…一緒に来ないか、魔女連隊に。」

「魔女連隊って名前からして女ばかりだろ。男の俺が入れるのか?」

「咲哉だったら男でも女でもどつちにでも成れるから大丈夫だろ。咲哉がどれだけ凄い大魔女か、イヴェリタ長官に伝えたら、咲哉のことを大歓迎だって言つてたし。もし、来るならそれ相応の地位も約束するつてよ。」

大魔女つて俺、男だから。確かに、クラスカードで女の英霊の姿を借りて生活することも可能ではある。しかし、姿を変えてもやっぱり俺という男の精神であることは変わらないのだ。女ばかりの所に男一人なんて肩身狭そうだ。

「う〜ん、お誘いは遠慮するかなあ。」

「えく。結構良い条件なのに。」

「でも、今度遊びに行くから。」

「おう、来い来い。あたしがドイツの名所を案内してやるよ。それに、お前とは、その、友達だからな。日独同盟もあるし、助けがいるいつでも呼べよ。」

「カツエも助けが必要ならいつでも言いなよ。出来る限りの協力するから。」

「お、おう。」

カツエが恥ずかしがるように少し頬を赤らめながら返事をした。

しかし、咲哉のこの発言が後の大戦に巻き込まれる原因となるとは思ってもいないのであった。

数年前、咲哉が勧誘された組織は伊・Uだけでは無い。

警視庁、超能力捜査部からも伊・Uに勧誘される前に入り、超能力捜査、顧問部の指導係という地位を与えられていた。

別に警察になりたいから入った訳では無い。

当時、咲哉は戦いに巻き込まれ、故意で無いにしろ、いろいろなモノを破壊していた。

そこに、警視庁のお誘いである。

あれ？これ、俺がやった事を警察は把握しているってことだよな。このお誘い断つたらどうなるんだ？何かヤバくね！ということが入っただけなのだ。

その後、もつとヤバイ其処らの国家よりも力を持った漫画みたいな組織、伊・Uから勧誘を受け、入ったのだ。伊・Uでの活動目的は自己の鍛錬や目的の実現など、各自の自主性に委ねられ、法規が存在せず、メンバー同士でも自己の目的の障害になるなら排除してもよしとする程に自由である。

だから、伊・Uに入ったからといっても、一度入った警視庁を即座に辞めるなんて警視庁に喧嘩売るような行動をする必要が無いことに咲哉は安堵した。

—そして、今日からは何の因果か、武偵高の教師である。

警視庁に出勤したら、上司に呼び出され、東京武偵高校に教員として行けと言われた。凶悪化する犯罪に対抗するために新設された武装した探偵、略して武偵。武偵高校は武偵を育成するための高校。そんな場所なだけあって、警察と共同戦線を組んだり、依頼を出したり、武偵高の生徒を警察で研修を受けさせたり、と武偵と警察の繋がりはい。恐らく、その関係で警視庁から人を送る話が出たのだろう。

確かに俺は顧問部の指導係だよ。

でもお飾りだから!!

いや…お飾りだから送られたのか。

はあ、まあ、しようがない。

そんな事を考えながら、銃声や爆発、怒号の聞こえて来る東京武偵高に向けて歩き始めた。

新任教師としての挨拶が一通り終えた後、穏やかそうな高天原ゆとり先生に校長室に案内される。

校長室の椅子に座っているのは東京武偵高校の校長、緑松 武尊。通称「見える透明人間」。奇人変人が多い武偵高校では特徴的な先生が多いが、緑松 武尊校長は真逆。容姿や声などの何もかもが、日本人の平均的特徴を取っており、逆に全く記憶に刻まれないという特徴のない特徴を持つ。

どこで会っても、気が付かない。気にならない。

仮にこの人物に命を狙われているても気を付けようが無い、超危険人物。

つまり、この人物は心理学技術による記憶に残らない技術を持っているのだ。

そんな人物が目の前にいる。緊張で手はじつとりと嫌な汗をかき、頭があまり回らない。

「丁度SSR科の教諭が行方不明で困っていたんだよ。だから———。という訳で今日からSSR学部を頼むよ。」

「は、はい!!」

意識がちよつと緊張で飛んで、何が何だか分からない。

「え、えつと、学科一つ任せても良いんですか?。」

「そこは警視庁超能力捜査の顧問部指導係であった君を信頼してだよ。」

「そうですか。ありがとうございます。」

そこで、警視庁での地位が影響してくるんかい。

それ、ただのお飾りだよ、なんてこの雰囲気で言い出せねえ。

…うん、もう雰囲気の流れされちゃえ。

「——では、これからよろしくお願いしますね。」

緑松校長の出す手を握った。

こうして、朔夜はSSR学科の教諭となった。

「あの小さいのが先生だよね。」

「あの先生、可愛いな〜」

「咲哉たん、はあはあ。」

「俺は咲哉先生に踏まれたい！」

「何言つてんだ、お前。ついに頭が可笑しくなったか。」

ガヤガヤとした生徒たちの声が扉前から聞こえる。

扉を開けるとピシヤリと止んだ。

ここはSSR学科にある稽古場。

床は板で出来ており、とても広い。

ここは、体術、槍、剣術等の訓練が可能な場所である。

みんなキツチリと一定間隔で間を取り、正座をしている。

とりあえずは彼らの真正面の真ん中に正座で座る。

「今日から講義する桜井朔夜です。よろしくお願いします。」

「よろしくお願いします。」

「私がこの講義で教えるる、パンクラチオン、槍術、剣術、医学等は全て古代ギリシャ式のもので。その中には現代のものよりも血生臭い物や古臭い物もあります。それを理解してこの講義を受けて下さい。」

「「は。」「」

「では、みなさん立って下さい。夢幻召喚（インストール）——（ケイローン）。」

人に教えたことなんて一度も無いからどうしたら良いのか全く分かりません。

先生として百戦錬磨のケイローンさん。助けて下さい！

お願いします！

—魔法陣は足元から頭の手へと移動して消ると、服装が戦装束に変わっている。

いや、服装だけでは無い、気配そのものが、一変した。

「これから、拳闘と組技を複合させた総合格闘技である。パンクラチオンその中でも古い古代ギリシヤ式の技をその身で体感してもらいます。構えなさい！」

「ええ!!」「ちよつと待つて下さい。」「あ、あの—。」

武器を構えるのに手惑うのは大半が1年生。

2年生、3年生は朔夜の雰囲気が変わると同時に、臨戦態勢に移っている。

「では、始めます。」

「え!!速っ—。」「うげっ!!」

一番前の人との距離を一步で詰めて殴る。そのまま流れるようにクルリと身体を回転させて横でぼんやりと立っている生徒に回し蹴り。

吹き飛んだ2つの身体はボーリングのように人を巻き込んだ。

蹴りで片足を足を伸ばしたところに横から蹴りが来る。その蹴りに手加減の意思は無い。その生徒の全力なのだろう。しかし、遅い。

その生徒の足に片手で組み付き、勢いそのまま、伸ばしていた足を振り下ろし、力を

増幅—ぶん投げる。

「やる気があるのですか。」

様子身をするように生徒全員、構えて動かない。

—と思つたら

「うおおおおおおおおお!!」

雄叫びを上げながら走ってくる二人の体格の良い男子生徒。

左右から抱きつくような全力のタックル。

—同時では無い。少し、コンビネーションがずれている。

それに咲哉は顎を軽く撫でるように右手で半円を描くように裏拳。

二人の男子生徒は咲哉の横を走り去り、糸が切れたように崩れ落ちた。

「なっ!!何が!」「何で!」

「ほら、立ち止まって無いで、とつとと来る。さっきのだって隙があつたのに、何で攻撃して来ない。」

「隙、隙なんてあつた!」「さっきの何が起きたのかも分からないんだけど。」「俺もだよ。」

「どうする?」

「何トロトロと話してやがる。来ないなら、こつちから行くけど。良いか?」

「こつちなら全員で行くぞ!!良いな!」「おう!」「それしか無い!」「やってやる!」

—結果、生れたてのは死屍累々の生徒達。

「ぜえ、ぜえ。」「もう無理。死ぬ。」「身体がく！」

「智里ちやくくん。」「ちよつと重い、私のもたれ掛かるな！」「これってSSRの授業か？」「何で先生は息一つ乱して無いんだよ。」「あり得ねく。」

「これが私の教える古代ギリシャ式のパンクラチオンだ。皆、分かったか？」

「せんせく、先生の動きが速すぎて殆ど見えませんでしたし、分かりませんでした。」「同じくです。」

「でも、どういうものなのか身体で実感しただろ？」

「それは、勿論。」「ええ、確かに。」

「じゃあ、これから技を教える。休憩は終わりだ、みんな立て。気絶している奴は叩いて起こせ。」

「はい!!」「yes、ママ」

「では、まず——」

—半年後

「ふんっ!」「はあっ!」「オラオラオラ!!」

分身しながら組手をする生徒達がいた。

「ハア—!」「コオ—!」

強烈な二人の『氣』がぶつかり合いビリビリと空間を震わせる。

一人は色白い肌で、体格の小さな黒髪の少女、佐倉 鹿瀬。見かけは何処にでも居そうな少女であるが、その身に纏うのは荒々しい猛獣の様な気。

もう一人は、筋骨隆々で身長2 m程の金髪を短く切り揃えた少年、釜鳴 康介。こちらの少年から放たれているのは柳を連想させる静かな気。鹿瀬から放たれる気をきれいに受け流している。

——対照的な両者であるが、共に無手である。

緊張が極限まで高まり弾ける。

先に動いたのは鹿瀬。

豪ツ！と空気を引き裂きながら右腕から放たれる剛拳。

それに対し、康介は右手の平で受け、力を全身に分散させて流すと共に右に捻り壊そうとするが、鹿瀬は流れに逆らわず、跳んで身体を右に回転させることで防ぎ、そのまま、顔に左足で回し蹴り。

康介は空いている左腕で即座にガードするが、鹿瀬は右腕の拘束をスルリと外して回し蹴りを利用して後ろに跳ぶ。

そこに康介の追撃、姿が4人に増加。4方向からの押し潰す様な連続突き。

しかし、鹿瀬の姿がユラリと空に消える。

康介は周囲に視線を巡らせる。∴居ない？上！

鹿瀬は天井を蹴って加速。身体を一回転させて、体重のたつぷり乗った膝蹴りを放つ。

対し、康介は肘撃ちで迎え撃つ。

とても素手で鳴らせるようなレベルじゃない轟音が鳴り響き、両者宙に弾け飛ぶ。

クルリと両者地を足に突け、即座に体勢を立て直し、踏み込もうとした、ところではやがんだ。

——すぐ横で闘っていた槍使いと無手の二人。

槍使いの気が極限まで高まり、呟く。

「風刃雲槍」

弧を描くように振るわれた槍から放たれる鎌鼬が、周囲を切り裂き、丁度康介と鹿瀬の上を通り過ぎる。

他の組手している生徒達も避けたり、持っている剣で鎌鼬を切り裂いたり——各々の手段で防ぐ。

「危っ、危なっ！」「もつと周囲に気を配れよ！」「ちよつと切れたぞ、ボケツ!!」

槍使いに文句を言うが、誰も重症を負っていない。

その練度は個人差はあるが全員が妙手級以上。中には達人級（マスタークラス）に到

達してしまっている者までいる。

空気が爆ぜ、轟音が鳴り響く。

そんな光景を咲哉はぼんやりと見ていた。

……どないしよ。